

国語の授業で「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか 新学習指導要領2017の改訂を読み解く

「読み」の授業研究会 編

主体性、対話の形骸化に警鐘

ここ数年、現場を席卷した言葉は「アクティブ・ラーニング」である。この教育改革のキーワードが、新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」に置き換えられている。本書はこの「深い学び」に対して、具体的な取り組みを示している。

編者は本書の「はじめに」の中で憂慮していた。「対話あって学びなし」や「形式だけの主体性」などが拡大するおそれ」という指摘である。特に、対話という誰でも疑うことができない言葉が実はくせものである。

「何のための対話かを明確に意識しないと容易に形骸化する。時間ばかりかかり成果が生まれない危険がある」

深い学びを直指しようと対話を取り入れるのはいいだろう。しかし、編者が指摘している警鐘をしっかりと受け止めて、授業実践に向かう必要がある。例えば時間を明示して、限られた時間の中で対話活動を設定しないと、実に効率の悪い授業になってしまう。本書の実践例で、対話時間が明示されていたことに対して、評者は深い共感を抱いた。

本書は文学教材と説明文教材の具体的な授業場面が、焦点を絞った形で示されている。だから、本書からヒントを得ながら、かつてのように「活動あって学びなし」の国語科授業が流行しないことを祈るばかりである。

(庭野 三省・新潟県十日町市教育委員会教育委員)



学文社 2484円
03・3715・1501